

連載④ 新学期の大学模様 教育改革とは何だったのか

4月の新学期、何万人といるこの国の大学教師たちは、新入生への最初の授業で何を語るのだろうか。教育と研究と行政に加えて外交（関係学会の事務）という4つの職責が重畳するなか、数年来の大学改革のあおりで複雑に繁茂した幾多の委員会の錯綜の森を掻き分けるうちに毎日が、毎年が飛ぶように過ぎ去ってゆく。「教育」はとかく研究のじゃまもの扱いをされ、任期制の導入にあたって、審査の対象となるだろう業績としてもカウントされにくく、下手をすると今回の「教育改革」の結果、かえって一層軽視されかねない状況に陥っている。

それにしても、今日のこの国の大学教育にあって、いったい大学で学生に何を教えるべきなのか、といった議論がきちんとなされたことがあるのだろうか。今回の教育改革に末端の一地方大学で携わった者として、疑問は消えない。初期の理想に燃えた改革案は、カリキュラムと単位数の都合、全学的な利害調整、対文部省交渉を経ると、いつのまにか形式的な事務書類

の残骸と化し、もっぱら入れ物と予算という尺度で計量された新カリキュラム実施に漕ぎ着けたころには、肝心の教育内容の改革は、多数の教官にとっては、納得もゆかぬままに課せられた労働強化として、教員組合からの糾弾の対象に還元されかねない。

21世紀にいかなる若者を社会に巣立たせるか、という議論の出発点は、もはや遠く後方に霞んでいる。そしてそうした現実を直視した報告書は、自己点検・評価の書類として相応しくなく、と自己検閲を加えられて、葬り去られる。大切なのは今回の改革による学生教育水準の向上実績を文部省に訴える報告だ。情報教育機器を揃える予算獲得こそが目標だ…

だが、情報ネットワークのアクセスを教える以前に、情報の価値と危険性を納得させ、情報発信の倫理を自覚させる必要はないか。そもそも情報化社会への参入が自己目的化してよいのか。大学とは何を学ぶところなのか。改革の背後には巨大な空洞が広がっている。

稲賀繁美
Inoue Shigemasa
LINKAGE学